

## 明治期の漢詩人大江敬香について ——「西詩体」を中心として

胡 加貝

### はじめに

木下彪は著書「国分青厓と明治大正昭和の漢詩界 廿七」<sup>1</sup>の中で末松謙澄と大江敬香が漢詩改良運動を起したことに次のように言及している。

大江（敬香）は其の頃（明治七年）英学と西洋史を修め、戈登將軍の事を漢詩に詠じ、之を友人志賀矧川に示した。志賀は英詩漢詩とも之を能くし、大江の詩を読んで、之は唐詩と西詩を折衷して新機軸を出したものと激賞した。爾來大江、志賀に末松（謙澄）も加はり、所詩漢詩改良運動を唱へた。

筆者は主に末松謙澄について研究してきたが、漢詩改良運動の実作者としては、以下本稿に説く通り、末松謙澄以上に大江敬香の存在が大きかったと思われる。大江敬香については、三浦叶が『明治漢文學史』（汲古書院、一九九八年六月発行）の

「洋詩の漢詩訳——大江敬香の洋詩を主として」の中で大江の洋詩の漢訳について、中村敬宇・末松謙澄・森鷗外・内田遠湖・柳井綱齋などと並べて紹介した。また、合山林太郎が『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』（和泉書院、二〇一四年二月発行）の中で大江の「平仄廢止論」について論じた。しかしながら、以上の先行研究では、明治詩壇で活躍していた大江敬香の詩学の素養、及び彼が試みた「西詩体」の特徴について殆ど触れられていない。本稿では『敬香詩鈔』<sup>2</sup>に収録されている大江の詩作、及び『史海』などの雑誌に掲載された西詩体を取り上げて、前述した問題について考察したい。

### 一、大江敬香という人

まず、伝記のよく整理されていない大江敬香について紹介する。『敬香詩鈔』の冒頭に収録されている「先君行略」、および

『沼津兵学校附属小学校』『徳島の百人<sup>3</sup>』を合わせれば、大江敬香の経歴が以下のように整理できる。

大江敬香、通称は孝之、徳島出身。安政四年（一八五六）十二月二十四日に、徳島市徳島町に生まれる。父は大江孝文、大属分課監察掛をしていた。敬香は幼にして唐詩選をそらんじたと言われ、長じて藩校修文館に入り漢学を修め、また別に英語を学んだ。明治五年、徳島藩主から井上省三・井上千吉・小室三吉とともに英国留学を命じられたが、祖母の反対のため果たせなかった。改めて藩主の命によって、慶応義塾に学んだ。卒業後、東京外国語学校を経て、東京大学文学部に入り理財学を専攻したが、病気のため中途退学した。東京外国語学校の同窓に、末松謙澄・末岡清一・嘉納治五郎・妻木頼黄・辰己小次郎・岡倉天心などがいた（『明治名士叢談<sup>4</sup>』の「末松謙澄氏の磊落」による）。明治十一年二十二歳の時、静岡県掛川の岡田良一郎に招かれ冀北学舎に英学・漢学を教授した。門下生には、後に文部大臣となった岡田良平、文部大臣・内務大臣などの要職を歴任した一木喜徳郎がいた。また、授業外の時間を利用して時論文章を執筆し新聞に投稿していた。明治十一年八月、静岡新聞新報主幹となり、この年から詩文の独学を始めた。明治十二年に函右日報客員となり、明治十三年三月に岡山に赴き山陽新報主筆となった。同年八月神戸新聞主筆代理も勤めた。明治十五年四月、大隈重信の立憲改進黨の掌事補となったが、父

の反対により脱党した。同年六月参事院御用掛となり、明治十九年七月に東京府庁に転じた。あわせて東京府立高等女学校講師も勤めた。明治二十四年に辞職し、後静岡実利民報の主筆を勤めたが、まもなく舎社が罹災して新聞も廃刊した。これ以後、大江は主に漢詩人として活躍した。三十一年一月『花香月影』という詩文雑誌を創刊し、よく詩文界の老先生の支援を得たが、四年間で廃刊した。また、花月社を創立し、毎月詩筵を開いて名流を招待していた。明治四十一年五月、『風雅報』を創刊すると、次第に世の中に流行し、中国の文人にも注目された。ついには明治天皇の目にもとまった。

漢学については、文は左伝と韓愈・歐陽脩を尊び、詩は白楽天・陸放翁・高青邱などの詩人を重んじた。明治詩壇において菊池三溪に師事し、森春濤にもしばしば教わり、森槐南にも親しむ<sup>5</sup>。また、詩人であっても漢文を学ばなければならぬと主張し、そのために創刊した雑誌は常に詩と文両方を掲載した。と言われている。終生西洋に遊ぶことがなかったが、その志望を息子の武男に託した。武男は「先君行略」の中で漢詩を解読する時に、西洋文法を利用すること、洋詩のスタイルに倣って数首の古詩を作ったこと（『嘗做西詩體、賦古詩數首』）について言及している。

以上、大江は経世の志を抱き、新聞人として政治社会に関心を持ったが、官界で不遇に終わり、後半生は漢詩文に注力した

生涯であったことが分かる。そのような生涯経歴が大江の漢詩創作にどのように影響しているかについて、日下勺水の執筆した『敬香詩鈔』の序文によって説明する。序文の結末の一節は次のように述べている。

子琴は詩を講じること数十年。風雅の道に於いて、究めざる所無し。尤も香山白氏に私淑す。其の詩流麗にして溫柔、典雅にして暢達。能く人情の幾微を發す。他の人決して及ぶ能はざるなり。夫れ詩文は風教に關するや。獨り識者之れを言ふに匪<sup>あ</sup>ず。世を論じるとの士、亦た皆取る有り。

是の故に「國風」「雅」「頌」、周徳の深く且つ遠きことを知らせるや。而して「變風」「變雅」、其の澤已に竭きることとを知らず。「黍離」「麥秀」、衰世の音と爲る。然らば則ち世運の隆に、大雅は何の作らざるの理有らんや。作る可くして作らざるは、蓋し爲政者其の要を得ざるなり。顧みるに禹域の文日久しくして淪胥<sup>りんじょ</sup>し、我尚ほ能く古道を存す。而して爲政者之れを鼓舞作興する能はず。子琴志す所、其の弊を救ふに在り、時に應じて興起する者は誰ぞ。

したがって、政治界から距離を置いた大江は「風雅の道」、すなわち世間の習俗や教化に關する漢詩創作を重視するのである。こうした思想は、日下の指摘しているように「詩経」まで遡ることができる。明治期において詩壇は一時盛んになったが、為政者らが重視するのは、文才を表現する応酬の漢詩に過

ぎない。大江も著作「明治詩壇評論」の中で依田学海の詩を引用して、官界における応酬詩を批判したことがある。<sup>7)</sup>

ところで、明治詩壇に資する『花香月影』『風雅報』を創立したことのほかに、明治詩史に当たる「明治詩壇評論」の執筆も大江の代表的な仕事と考えられる。神田喜一郎氏が同文を『明治漢詩文集』の付録としてつけており、さらに「編者後記」の中でそれについて「極めて肯綮にあたっている」と高く評価している。

## 二、大江敬香の漢学の素養

革新的な西体詩を紹介する前に、そのベースになる伝統的な漢学について述べてみたい。本節では大江の漢詩文に關する学識が反映された詩作を取り上げて説明する。

漢詩人である大江は、(漢学による)中国思想について、まともに論じた著作は見当たらないが、漢詩作品にある程度にうかがうことができる。「憶亡兒靜男」(『敬香詩鈔』一二葉表、以降詩集名を省略する)に「誰知周是蝶、初信命同塵」(誰知らん周は是れ蝶なり、初めて信ず命は塵と同じと)と述べている。息子の早世に対して莊子の生死に關わる思想によって自分を慰めている。「甲寅歲朝三首」(一四葉表)に「詩書安本分、泉石樂天真」(詩書本分を安んじ、泉石天真を楽しむ)

と述べている。これによつて中国文化における「樂天知命」(天を楽しみ、命を知る)の思想が窺える。「秋懷八律」(二七葉表)のその(三)には「功名舉世煩襟甚、泉石何人逸興添」(功名舉世の襟を煩はすこと甚だ、泉石何人逸興を添ふ)と述べている。前の一句にも「泉石」という表現を用いているが、これは泉石を好み、自分を守る生き方を選んだ徐摛の事跡より影響を受けているためと思われる。一方で、その(三)に「黄昏偶與邨翁語、閒却朱家禮法嚴」(黄昏偶邨翁と語り、閒却す朱家の禮法の嚴しきを)と言ひ、その(四)に「彼都人士驕奢甚、儉素吾從家訓嚴」(彼の都の人士は驕奢たること甚だしく、儉素たる吾は家訓の嚴しきに從ふ)と言っている。民間における朱子学などの漢学による教化を重視していることがわかる。最も大江の自己認識がうかがえる詩は、「秋懷八律」の(八)である。次のように述べている。

風裏翩翩落葉尖	風裏	翩翩として葉尖に落ち
月明有影閃踈簾	月明	影有り 踈簾を閃く
違時須隱鳩巢小	時違へば	須らく鳩巢の小に隠るべく
獻策寧知蛇足添	策を獻するに寧ろ蛇足の添ふを知らん	
久矣身空三黜後	久しきかな	身は三黜の後に空なり
宜哉詩亦四愁兼	宜しきかな	詩亦た四愁を兼ね
苔磯煙水秋宜釣	苔磯 煙水	秋は釣るに宜しからん
擬學當年高士嚴	擬る	當年の高士の嚴に學ばんと

「三黜」とは、儒家に讃えられる偉人柳下恵が三度官位を退けられて、官界において出世する志を失うことである。「詩亦四愁兼」とは、漢代の文学者張衡が左遷された時に、「四愁詩」によつて不平を詠じることである。「高士嚴」とは後漢光武帝時期の隱者嚴光のことを指す。詩の概ねは明哲保身の道理について述べているが、民間の文人として活動しようとする意識が示されている。以上は、中国の思想より影響を受けた大江の処世の道であるが、次に彼の文学主張について述べる。

「秋懷八律」の(五)に「又繙詩卷重精讀、深感唐賢格律嚴」(又詩卷を繙き重ねて精しく讀みて、深く感ず唐賢の格律の嚴しきを)と述べている。唐代において成熟した近体詩についてその格律は嚴し過ぎると指摘している。一方で格律の緩さによつて比較的創作に自由が与えられている古体詩を推奨することは、大江の漢詩改良運動の核的な主張である。また、岩溪裳川と神田香巖との唱和詩に次のように述べている。

冠城北樓席上次岩溪裳川韻贈神田香巖	冠城北樓の席上、岩溪裳川の韻に次して神田香巖に贈る
各天相憶廿年前	各の天に相ひ憶ふ 廿年前
此夕勾留亦夙緣	此の夕に勾留するは亦た夙緣
絶代竹枝劉禹錫	絶代の竹枝 劉禹錫
半生綺夢杜樊川	半生の綺夢 杜樊川
韶光方及牡丹節	韶光方に牡丹節に及び

彩筆重題燕子箋

彩筆重ねて燕子箋に題す

説到風流誰是主

風流を説き到れば 誰か是れ主ならん

功名何用畫凌煙

功名 何ぞ用いん 凌煙に畫かるるを

「竹枝劉禹錫」とは、劉禹錫が民謡を改良して「竹枝詞」を

創立したことである。「竹枝詞」は地方の習俗や人情を描くことを主題とするため、詩のジャンルの一つとしては主流に入らず、大江にとつては多くの竹枝を作っているわけではない。しかしながら、明治期において海外の風物を詠じる詩が一時盛んになり、大江はそれに注目し、「明時詩壇評論」の中で言及している<sup>(9)</sup>。海外風物詩は「竹枝詞」より奪胎されたものというべきである。

「綺夢杜樊川」とは、杜牧（号は樊川）が揚州の自分の青樓で酒色におぼれすさんだ生活をした経歴を詠じる詩作を指している。杜牧の「借古諷今」の詩は高く評価されているが、風月人情を詠じる詩はそれほど重視されているとは言えない。しかしながら、大江自身は杜樊川の風月を詠じる一面によく注目している。「再贈蓮舟翁」（二五葉表）に「文士推稱蘇玉局、才人艷説杜樊川」（文士 蘇玉局を推稱し、才人 杜樊川を艷説す）と述べ、「遣興」（二五葉裏）に「樊川薄倖愧踈狂、禪榻髻絲新感長」（樊川の薄倖にして踈狂に愧じ、禪榻 髻絲 新感長し）と述べている。

「燕子箋」とは一般的に中国明代の阮大鍼の創作した戯曲を

指す。それに対となっている「牡丹節」は、明人湯顯祖の戯曲「牡丹亭」を指すのではないかと思われる。とにかく、竹枝詞なり、風月詩なり、戯曲なり、大江が詩文創作において寛容さを求めている意識が窺える。

唐宋の大詩人に注目する一方で、比較的論争の対象となつた王漁洋の詩作にも触れている。王漁洋の詩文は、日本において元文・寛保の頃に注目を集めたが、後に袁枚に関心が遷つたと言われている<sup>(10)</sup>。そして明治期に入って森春濤によつて再び注目されるようになった。大江には「秋柳二首追次王漁洋韻」（二二葉表）という詩がある。王漁洋の「秋柳詩」四首は、いずれも江南の光景を描く作品であり、大江の次韻も同じく南朝金陵の興亡による物事の移り変わりを描いている。尾聯の「南朝事去休重説、愁絶繁華與昔違」（南朝の事去りて 重ねて説くを休めよ、愁絶 繁華は昔と違ふ）という一句はその趣旨を示している。

一方で、詩には「紅絃朱唱迹全非」（紅絃 朱唱 迹全く非とす）とも言っている。「紅絃朱唱」とは、杜牧の「羊欄浦夜陪宴會」に「紅弦高緊聲聲急、珠唱鋪圓裊裊長」（紅弦高緊聲聲急なり、珠唱鋪圓裊裊として長し）<sup>(11)</sup>と言う。王漁洋には「神韻説」の集大成と言われる「秦淮雜詩二十首」があるが、江南秦淮の光景を描く詩においては杜牧が王漁洋の先に立つと言うべきである。<sup>(12)</sup>

風月を詠じる詩以外に、大江は人情を語る小説や筆記も涉獵していることが、その詩作によって窺える。例えば、依田学海が創作した短編漢文小説「小花傳」に関する詩作が見られる。次のようにある。

讀小花傳<sup>13</sup>

「小花傳」を讀む

風丰儼見李將軍

風丰は儼として見ゆ 李將軍

河北年前足異聞

河北年前 異聞を足す

莫是真情爲罪障

是れ真情の罪障を爲すこと莫かれ

謬傳紅拂本私奔

謬傳す 紅拂本私奔するを

「小花傳」は幕末の軍人小蓮と妓女小花に関する逸話である。

「小花傳」の中では、「薄小蓮」と称しているが、その原型は薄井小蓮、すなわち薄井龍之（一八二九〜一九一六）である。<sup>14</sup>大江は「小花傳」より唐代名将李靖と紅払女との伝説を連想した。李靖と紅払女の物語は、唐代の文言小説「虬髯客傳」によつて知られるが、大江の尊ぶ高青邱には、「題紅拂妓」という詩作もある。また、日本において明治三十四年に刊行された坂井松梁の『佳人と才子』も「紅払妓と李靖」について言及している。ただし、大江は明治二十三年（一八九〇）に発表した西体詩に既に紅払のことを典故として用いている（後述）。

以上の漢文によつて書かれた通俗文学の作品以外に、大江は和文の小説も涉獵している。彼に「讀紫史四首」「節二」（十八葉裏）という詩の二首があり、明石を詠じる一首の頷聯は、

「固知西子起荒岸、更愛楊妃生僻郷」（固より知り 西子荒岸に起こるを、更に愛す 楊妃僻郷に生まるるを）と述べている。中国古典文学に登場する西施や楊貴妃などの薄幸の女性に思いを寄せている。こうした表現は、女性の口を借りて自身の不遇を述懐する「閨怨詩」と異なり、薄幸の女性それ自体に関心を寄せていることが見て取れる。内容上の新しい題材にとどまらず、新しい詩の体格も試し、六言律詩の漢詩も作っているが、紙幅の制限があるため、本稿では割愛する。

以上、大江の漢学の学識について確認してきたが、次の節にその「西詩体」について論じる。

### 三、大江敬香の「西詩体」

「西詩体」について、明治二十四年（一八九二）十月に刊行された『早稻田文学』初号（国会図書館所蔵）の「漢詩のおとづれ」<sup>15</sup>に次のような記述が見られる。

通俗（ポピュラー）三昧とも稱すべきは所謂『慷慨昧』『西詩昧』『評林昧』の三なり。甲は『佳人の奇遇』中に見えたるが如きを代表者となすべく。乙は西洋の詩趣を加味して一派をなせるものにて末松青萍、井上巽軒、志賀劔川、大江敬香氏など此派の名家なり。丙は嘲世風俗を主とするものなれど大かたは楽屋に落つるが如し。『天狗星判』

『新白眼』『一家言』『木鐸』など題して間、新聞紙上にみえたりしは是なり。いづれも只一時の遊戯文字なるべし。

海外渡航の経験がない大江に、西洋人物を詠じる長篇古体詩は合わせて五首ある。まず、木下彪の言及した「戈登將軍」という作品は、漢詩集の『敬香詩鈔』にも全集の『敬香遺集』にも見当たらないが、明治二十一（一八八八）年九月三十日に発刊された『芸窓之友』第七號（国会図書館所蔵）に「戈登少將歌」と題する漢詩が掲載されている。戈登將軍とは、すなわちチャールズ・ジョージ・ゴードン<sup>(16)</sup> (Charles・George・Gordon, 1833～1885)、勲功のあるイギリス軍人である。大江は長篇の漢詩によってその事跡を讃えた。紙幅に制限があるため、一部抜粋して取り上げて述べる。次のようにある。

戈登少將歌

戈登少將の歌

孤城堅守七閩月

孤城 堅守すること七閩月

其如力盡糧亦竭 其れ如せん 力盡きて糧亦た竭くことを

援軍不到命已窮

援軍到らずんば 命は已に窮まり

只應沙場曝白骨

只應に沙場に白骨を曝すべし

【自註】言ハ已ニウチジニト覺悟ヲ定メタリ。○八解四句。

馬似豈是子奇儉

馬似豈に是れ子奇の儉ならん

【自註】子奇睢陽ヲ圍ミシ「史ニ見タリ。

君也精忠過張巡 君や精忠たること張巡に過ぐ

【自註】張巡許遠睢陽ヲ守リ城陥リ巡屈セスシテ死ス

長天有聲大星落 長天に聲有りて大星落ち

【自註】諸葛孔明將ニ死セントス大星アリ其營ニ隕ツト

蓋シ此二本キシナラン。

白邊郊外雨如塵 白邊の郊外 雨ふること塵の如し

【自註】少將ノ死ヲ叙ス。○九解四句。

英廷底事忽權衡 英廷底事ぞ 權衡を忽せにし

終救援軍後三日 終に援軍をして三日後れしむ

【自註】齊ノ檀道濟ノ語ニ本ク。

萬里長城壞一朝 萬里長城を一朝に壞ち

跡與張鎬歸一轍 跡 張鎬と一轍に歸す

【自註】張鎬睢陽ノ圍急ナルヲ聞キ道ヲ倍シ赴キ、援至

ルニ及テ城已ニ陥リ三日ヲ經タリト又史ニ見タリ。此句

上ノ「豈是子奇儉、精忠過張巡」を承ク。

「馬似」とは、マフデイー (Mahdi) であり、マフデイー運

動を起したリダーのムハンマド・アフマド (Muhammad

Ahmad, 1844～1885) を指している。「白邊」とは地名であ

る。睢陽の戦の時に唐の朝廷が張鎬を派遣して救援しようとし

たが、張鎬が着いた三日前に睢陽城は陥落した。張巡は降参せ

ず殺された。ハルツーム包圍戦の時も、ゴードンは長い期間堅

守したが、結局イギリスの援軍を待つことができず、戦死し

た。以上の二節によって、大江がハルツーム包圍戦と睢陽の戦とを類似したものとして捉えていることがわかる。

大江がこのように親切に説明したのは、詩の掲載されている『芸窓之友』の読者は洋学に親しむ人と漢学になじむ人との両方があると考えたためだと思われる。西体詩はそもそも洋学と漢学を有機的に融合しようとしたものである。

既述したように大江は「戈登少將歌」を友人志賀矧川に見せたことがあると木下彪が述べている。また志賀は「戈登少將歌」に批評を寄せている。「此等格調、非知西文西詩之境者不能作、盖折衷唐詩西詩、而剽起新機軸者」(此等の格調、西文・西詩の境を知る者に非ずんば作る能はず。盖し唐詩と西詩を折衷し、而して新機軸を剽起する者なり。)と述べている。

稲畑耕一郎氏の研究<sup>12)</sup>によれば、志賀は「テクサス獨立戰役殉難烈士の碑」でアラモの戦と睢陽の戦との類似点について述べている。本稿の冒頭に挙げている木下彪の記述に合わせて見れば、大江の「戈登少將歌」に書かれているハルツーム戦と睢陽の戦に関する内容が志賀の創作に参考となったと言える。このように、類似する漢詩文の典故を活かして、西洋の物事を詠じる長篇の漢詩の創作することが、すなわち志賀の言った「新機軸」である。漢学を生かして西洋の先進文明を受容しようとする一方で、漢詩文の存続のための試みを行っていると考えられる。「戈登少將歌」の次に、大江はまた雑誌『史海』に「若謨

斯哥克歌」「麻理亞哲列沙歌」「蘇王瑪理歌」「徐世賓歌」を掲載している。<sup>13)</sup>『史海』にはそれらの人物に関する記事も見られる。その対応関係を整理し、次に示しておく。

・明治二十四年(一八九二)九月、『史海』五号、「若謨斯哥克歌」(二十二節八十八句)・『史海』三号、鹽島仁吉「ジェームス・クック」(二十八頁)

・同年十月、『史海』六号、「麻理亞哲列沙歌」(十八節七十二句)・『史海』四号、東嶺野史「埃利亞女王マリヤ・テレサ」(二十五頁)

・同年十一月、『史海』七号、「蘇王瑪理歌」(十八節七十二句)・『史海』二号、桑原啓一「蘇格蘭の女王メリー」(二十三頁)

・明治二十五年(一八九二)一月、『史海』八号、「徐世賓歌」(十八節七十二句)・『史海』七号、桑原啓一「ジョゼフィーニン皇后」(十一頁)

これらの西洋人物に関する伝記記事は、いずれも大江の詩より早い投稿である。内容から見れば、大江の漢詩の及んだそれらの西洋人物の事跡は、記事の範囲を超えない。そのため大江はそれらの記事に基づいて西詩体を作ったと考えられる。しかしながら、それらの記事はクロニクルに当たるものであり、人物の品格について述べる内容は極めて少ない。それに比べれば、大江の漢詩は比較的に人物像の描写に力を注いだとは言え



よう。鹽島仁吉の記事の中に、ジエームス・クック<sup>(19)</sup>について「斯くてクックは司令官の位階に進められ、王國協會は特に其の名譽を表彰し……」と述べている。大江の漢詩は次のように述べている。

從其所好事乃成 其の好む所に従へば 事は乃ち成す

笑他蝸角爭功名 笑ふ 他の蝸角に功名を争ふを

着眼由来與人異 着眼は由来人と異なり

偉業占得金紫榮 偉業占め得たり 金紫の榮を

クックが終始名譽を囚らずに航海事業に力を注いだことについて高く評価している。また、『史海』六号には小山米峰（正武）の批評もついている。「若謨斯哥克歌」について次のように述べている。

小山米峰云ふ…此篇は英國の沈毅雄武たる丈夫の氣と、

其の遠圖宏志、刻苦勉勵して、天文地理や鑄山煮海の術

を講じることがを寫出した。天下の青年社會をして小説の輕

浮柔惰の病を免ぜしむる者は、盖し此の種の詩に在るなり<sup>(20)</sup>。

したがって、小山からしては、大江がジエームス・クックの生涯經歷を叙述したのは、彼の事跡によって日本の若い者を激励するためである。当時においては西洋文芸の影響によって小説がだんだん盛んになっていた。大江が新しい「西詩体」の試みによって漢詩を振興するためであった。さらに漢詩の習俗教

化に対する作用を果たすという自覚的であることも明らかである。それぞれの詩は着目している点は異なるため、さらに具体的に説明する。

まず、東嶺野史の「奥地利女王マリヤ・テレサ」に「古より女性の身を以て九五の位を踏みしもの其人寔に多し。然れども英武克帝王の實を盡せしもの我邦の神功皇后、英吉利のエリサベス、奥地利のマリヤ、テレサの如きは、甚だ希なり」と述べている。大江はそれに基づいて「麻理亞哲列沙歌」に次のように述べている。

形勢轉似古春秋 形勢轉じて古春秋に似る

齊桓晋文快恩讐 齊桓晋文 恩讐快し

紫州元屬奥版籍 紫州は元 奥の版籍に屬す

恢復無方事終休 恢復する方無くして 事は終に休む

艱難誰不思良相 艱難 誰良相を思はざらん

珂公當國有瞻望 珂公當國するに瞻望有り

女皇鑑識何曾愆 女皇の鑑識は何ぞ曾て愆はん

輔翼不讓諸葛亮 輔翼 諸葛亮に譲らず

「紫州」は、すなわちシリージア (Schlesien) である。右に挙げている詩の一節に述べているのは、オーストリアがフランスとロシアを同盟として、イギリスを味方としたプロイセンよりシリージアを奪回しようとした「七年戦争」(Seven Years War) のことである。「七年戦争」は、十八世紀のヨーロッパ

に深い影響を与えた大規模戦争と言われている。大江は当時の状況を、中国の歴史上、斉桓公・晋文公の制覇する春秋時代に似たものと捉えている。さらに「珂公」を三国時代の名臣諸葛亮に喩えている。こうした中国史の典故を踏まえる表現によって女王マリヤ・テレサ (Maria Theresia, 1717～1780) の「英武克く帝王の實を盡せし」という様子が生き生きと描かれていると言えるのである。

マリヤ・テレサがポジティブな女性形象として捉えられているとすれば、スコットランド女王メアリー・ステュアート (Mary・Stuart, 1542～1587) は比較的ネガティブなイメージが反映されていると言えよう。桑原啓一の「蘇格蘭の女王メリー」に「古より佳人多くは薄命矣、然れども蘇格蘭の女王メリーの如きは稀なり。メリー女王の貴きに生れ、之に加ふるに絶代の美貌と出群の才藝と以てし、而して終に刑場の露と消えたり。」と述べ、その薄幸の女性形象について言及している。大江は「蘇王瑪理歌」には次のように述べている。

佳人易遇是嬌妬 佳人は是の嬌妬に遇ひ易く  
 無情英皇厭嫁娶 無情の英皇 嫁娶を厭ふ  
 王冠之美誤此身 王冠の美 此の身を誤り  
 不及紅拂富鑒悟 及ばず 紅拂の鑒悟に富むるに

既述したように、大江は従来古典文学によって書き記されている薄幸の女性に関心を寄せている。ここでは「紅拂」という

典型的な知恵の優れた女性形象を参照点として、女王メリー自身の見識不足について批判している。また注目すべきなのは、紅拂は出身階層の低い歌妓であり、女王の身分と強烈な対比となっている。こうした表現上の工夫は、やはり世の中の教化を意識したためと思われる。

ちなみに、この詩には森槐南の批評が付いており、「此れは早稻田文學謂ふ所の西詩體、明治の特創の格、前に古人無し。」と述べている。そこで「謂ふ所」と触れられているのはすなわち『早稻田文學』に掲載されている「漢詩のおとづれ」のことだと思われる。大江の「西詩体」はついに詩壇の中心である槐南の目を引き、さらに高い評価を得た。

「徐世賓歌」は言うまでもなく、女性形象を描く作品であるが、その中に見られるバリに関する描写も取り上げて述べたいと思う。

南朝曲罷想風標	南朝の曲罷みて風標を想ひ
宮裏喧傳善歌謠	宮裏より喧傳す 歌謠を善くするを
楊柳樓臺春試舞	楊柳の樓臺 春に舞を試み
芙蓉殿閣夜吹簫	芙蓉の殿閣 夜に簫を吹く
官家侈靡民怨久	官家の侈靡 民怨むること久しく
無辜路易引其咎	無辜の路易 其の咎を引く
巴黎城闕悲風腥	巴黎の城闕に悲風腥く
眼看萬家歸鳥有	眼もて看る 萬家 鳥有に歸するを

「徐世賓」<sup>ジョゼフィーヌ</sup>とはすなわちジョゼフィーヌ・ド・ポアルネ (Josephine de Beauharnais, 1763 - 1814)、ナポレオンの最初の妻である。ジョゼフィーヌは、フランス革命後間もなくしてナポレオンと結婚したのである。右の一節では、贅沢三昧によつて壊滅を招いた南朝金陵の風景を以てフランス革命の前後のパリを描いている。第二節で述べたように南朝を主題とする詩は、杜牧や王漁洋などの詩人によつて日本の知識人たちにも知られ、大江はそれを活用している。

ところで、ジョゼフィーヌは明治期において淑女や閨秀の代表として描かれている。また常に言及されるのは、彼女とナポレオンとの悲劇的なラブストーリーである。例えば、桑原啓一「ジョゼフィーヌ皇后」の中では、「ジョゼフィーヌは奈勃翁の肖像を手に取り、之を熟視しつゝ、エルバの島―奈勃翁と云ふが最後の言葉にて溘焉息絶へたり。」という場面を語っている。大江はそのラブストーリーについて詩に次のように述べている。

傷心跡同渭南陸 傷心の跡は渭南の陸と同じ  
 沈園感舊重慟哭 沈園に舊を感じて重ねて慟哭す  
 不見驚鴻照影來 見ず 驚鴻 影を照し來るを  
 依稀橋下春波綠 依稀として橋下の春波緑なり

この一節は陸游の「沈園二首・其一」、すなわち「城上斜陽畫角哀、沈園非復舊池台。傷心橋下春波綠、曾是驚鴻照影來」

(城上の斜陽 畫角哀しく、沈園復た舊き池台に非ず。傷心する橋下 春波緑なり、曾是是れ驚鴻 影を照らし來る) に基づいて作られたものである。陸游の詩は、その最初の妻、唐婉を偲ぶために作ったものである。「沈園」とは、陸游が唐婉とが一緒に住んでいたところである。ジョゼフィーヌは離婚した後にもマルメゾン城のナポレオンの旧居で余生を送ったと言われている。大江は陸游の詩の表現を借りて、ジョゼフィーヌが亡くなった後、ナポレオンが彼女を偲ぶ時の様子を描いている。

「徐世賓歌」について森槐南は「(前略) 或云敬香崇奉在西詩。然每一篇出、學漢詩之格。是可異也。」(或いは敬香の崇奉は西詩に在りと云ふ。然るに一篇出づる毎に、漢詩の格を學ぶ。是れは異とす可きなり。) と指摘している。大江の「西詩体」はいずれも「〳〵歌」という題をつけており、その筆の運びも白楽天の「長恨歌」に近い。つまり、「〳〵歌」は長篇叙述的な「長歌」の体格を採用しているのである。これはすなわち「漢詩の格を學ぶ」ことと考えられる。

さらに末松謙澄が「歌樂論」で言及している理論を借りて言え、西洋詩と総称されるものの中にもいくつかのジャンルが存在している。すなわち「リーリック (普通唱歌) 体」、「エピック (物語) 体」、「ドラマチック (芝居) 体」という三つである。また、「樂天ノ長恨歌ナドハヤ、物語ノ意ヲ得タル者ト思ハル。」と述べている。顧みれば大江の「西詩体」は「エピック

ク体」に近いと言える。しかしながら、明治期において常に注目されるのは「リーリック体」である。(翻訳された西洋詩の作品は殆んどその類に属する。)したがって、槐南の指摘した「是れは異なる可きなり」とは、「エピック」より「リーリック体」に転化させるべきことを言っていると思われる。

### まとめ

幼い頃に漢学を学び、青年時代に洋学を修めた大江敬香は、壮年期に主にジャーナリストとして活動した後詩文雑誌を主宰する漢詩人となった。江戸時代から重視される経典的な唐宋詩を学ぶ一方で、明治期において興った清詩も涉猟している。また漢文の小説や筆記、及び古典和文学にも触れた。思想において莊子より影響を受け、俗世間を離れる傾向が窺える。しかしながら、詩によって世の中の教化を重視している。また、詩学における主張として唐詩は格律が厳し過ぎることに言及しており、この意識は「西詩体」を創作する時に古体詩を採用したことに反映されている。

一方、海外体験がないにもかかわらず、洋学者によって伝えられた目新しい外国の記事を利用して、西洋人物の事跡を詠じる「西詩体」の創作を試みた。西洋と東洋の歴史の事跡の類似点を捉えることは、大江の「西詩体」の特徴の一つと言える。

こうした工夫は共通点を軸として西洋文明を紹介するためである。さらに、明治中期以降影響力が強くなってきた西洋文明によって習俗教化の目的を果たすためである。「戈登少將歌」によって忠誠を尽くして戦死した將軍の事跡が伝えられており、「若謨斯哥克歌」によって地理学に貢献した探検家の精神が描かれている。また、「麻理亞哲列沙歌」は正面から、「蘇王瑪理歌」は反対面から、それぞれ女性として見識を有することの重要性を強調している。「徐世賓歌」は従来儒教で軽視されてきた男女の愛について述べている。決定的な判断評価を棚上げにして、漢詩による叙述は議論の乏しい年代記と比べれば戒めの趣に富んでいると言える。しかしながら、こうした趣は「勸善懲惡」を主題とされる叙事の漢文学に近いが、明治中期以降において「勸善懲惡」の文学思想は常に批判の対象とされていた。これは大江の「西詩体」作品が五篇しか伝わらない原因の一つと考えられる。

大江敬香に関する資料に、ほかの「西詩体」を作った経験がある人も言及されている。例えば、井上巽軒や志賀矧川や国分青厓や野口仁里などである。「西詩体」の全貌を理解するために、その人らの作品に関する研究も必要である。それを今後の課題としたいと思う。

注

- (1) 『師と友』(国会図書館所蔵)三五〇号参照。
- (2) 『敬香詩鈔』は、大江敬香歿後に、彼の息子大江武男に刊行された詩集である。本稿では国会図書館所蔵のものを利用している。
- (3) 『沼津兵学校附属小学校』(大野虎雄著、一九四三年六月、大野虎雄発行)の「漢詩人大江敬香」条目、『徳島の百人』(徳島の百人編集委員会編、一九六八年十月、徳島市中央公民館)の「大江敬香」条目参照。
- (4) 大江敬香の執筆した記事であり、その文集の『敬香遺集』に収録されている。
- (5) 松平康國の「敬香詩鈔序文」に「子琴師菊池三溪又屢請益春濤、槐南爲友。」と述べている。
- (6) 「子琴講詩數十年。於風雅之道、無所不究。尤私淑香山白氏。其詩流麗而溫秀、典雅而暢達。能發人情幾微。他人決弗能及也。夫詩文關乎風教。匪獨識者言之。論世之士、亦皆有取焉。是故國風雅頌、知周德之深且遠。而變風變雅、知其澤已竭。黍離麥秀、爲衰世之音。然則世運之隆。大雅有何不作之理。可作而不作。蓋爲政者不得其要也。顧禹域文獻日久淪胥、我尚能存古道。而爲政者不能鼓舞作興之。子琴所志。在救其弊。應時而興起者誰。」
- (7) 依田学海の詩は「花則東臺月墨川、一春身事付三絃。昨宵公使歸朝宴、今夜縣官赴任筵。」と言う。『敬香遺集』九〇頁。
- (8) 『梁書・徐摛傳』(一九七三年五月、中華書局)に「摛年老、又愛泉石、意在一郡、以自怡養。」(摛は年老い、又泉石を愛す。意は一郡に在り、以て自ら怡養す。)及び「至郡、爲治清靜。教民禮義、勸課農桑。期月之中、風俗便改。」(郡に至りて、治を爲すは清靜、民に禮義を教へ、農桑を勸む。期月の中、風俗便ち改む。)と述べている。以上の記述にしたがって、大江の理念は徐摛に近いと言える。
- (9) 『明時詩壇評論』(『敬香遺集』八四〜九四頁)の中で海外の風物を詠じる詩について述べている。
- (10) 石田肇「藤野真子と陳矩——秋柳——四律をめぐって」(『東洋文化』復刊八五号(三三三三号)、二〇〇〇年九月、五四〜六二頁)は藤野真子によって書かれた『悟蘭吟館詩集』序文の内容をまとめて、「日本では昔は白居易、蘇軾、陸游を学び、元文・寛保の頃になると王士禎、朱彝尊に遷り、今は袁枚、張問陶を愛慕している……」と述べている。
- (11) 『杜樊川詩集三』(日本・館柳灣校、青木嵩山堂出版、国会図書館所蔵)巻五の十八裏参照。
- (12) 王漁洋と神韻説について、『王漁洋研究』(荒井礼著、筑波大学博士(文学)学位請求論文、二〇一四年度)参照。
- (13) 『敬香詩鈔』四九葉裏参照。
- (14) 明治三十四年(一九〇一)に出版された『維新豪傑の情事』(長田偶得著、一九〇一年四月、大学館発行、国会図書館所蔵)の「薄井小蓮」の部分では、「小花傳」を書き下して収録している。
- (15) 木下彪の「国分青厓と明治大正昭和の漢詩界廿七」にしたがえば、「漢詩のおとづれ」の作者は、桂湖村・柳井綱齋・新田柑園である。
- (16) 西洋の人物については、基本的に『日本大百科全書』『世界大百科事典』『ブリタニカ国際大百科事典』などを参考としている。
- (17) 稲畑耕一郎「地理學者志賀重昂の漢詩——アラモ遺跡に立つ

- (18) 「漢詩碑」に觸れて―（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』六三号、二〇一八年三月、一〇〇八～九九一）参照。  
西洋人名や地名などに関するカタカナのルビについては、『史海』に掲載されているものにしたがって表記している。以下は同じ。
- (19) ジェームス・クック (James Cook, 1728～1779)、『イギリスの有名な海洋探検家である。生涯にわたってイギリス帝国の海外進出にも無視できない貢献を与えたと言われている。』
- (20) 「小山米峰云・此篇寫出英國沈毅雄武丈夫之氣象、與其遠圖宏志刻苦勉勵講天文地理鑄山煮海之術。……今日文壇善此種雄篇者、矧川巽軒青厓仁里及吾兄耳。使天下青年社會免小説輕浮柔惰之病者。蓋在此種之詩焉。」
- (21) 珂公カウニッツとはすなわち、カウニッツ (Kaunitz, 1711～1794)、『テレジア在位時期のオーストリアの政治家である。』
- (22) 『陸放翁詩解下』（鈴木虎雄著）参照。
- (23) 末松謙澄の議論は明治十八年一月二八日の『東京日日新聞』参照。